

記憶の海と向き合う～持続への問い

突然の激しい揺れと共にボトルやグラスがなだれ落ち、床一面がそれらの破片と液体に被われた。私は、そのとき原宿のカフェで打合せ中だった。それから二日間帰宅の手段を奪われ、まさかの帰宅難民になってしまった。

震災の日の夜は、代々木公園で知り合いになったバーのマスターの厚意でお店まで案内して頂き、帰宅難民の若者たちと和やかな雰囲気でも過ごすことができた。しかし、その間も刻々とテレビに映し出される被災地の状況に、皆ことばを失っていた。私が数年前に旅をして見たあの美しい三陸海岸の風景が、多くの命と共に一瞬にして失われた。あまりにも恐ろしく悲しく辛い映像の繰り返し。

震災以来、想定外という言葉をよく耳にする。今の科学では、この規模の地震や津波を想定することは出来なかったという意味だろう。しかし、「想定外」は無かったのではない。誰かが何かを想定したときに、そこには常に「想定外」は存在しているのだ。専門家は仮説をたて未来に起きるであろう状況を想定する。その時点で得られるデータや科学的な根拠から妥当と考える仮説が専門家間で共有され、想定が行われる。専門家の社会（学会など）ではこの仮説と想定が基準となり、想定外はとりあえず議論の対象から外される。仮説は、ふつうデータが多く得られ数値化可能な事例を基にたてられる。三陸海岸では、50年前に起きたチリ地震による津波を参考に様々な対策が講じられた。しかし、今回の津波は、まさにその想定外であった。避難場所に指定されていた施設までが津波にさらわれ、重大な原発事故も発生した。

三陸沖地震では、過去にも1896年、1933年と大津波が発生し多くの死傷者を出している。869年の貞観地震など1000年以上前に発生した大規模な津波の形跡もあるという。大津波が約500年間隔で発生している可能性も指摘されていた。もちろん、過去の記憶に遡れば遡るほど、正確なデータは少なくなり科学的な仮説をたてられなくなる。すると、それらは想定外に含まれてしまう。

未曾有という言葉も何度も耳にする。未曾有とは、梵語由来で「いまだかつてあらず」の意味だ。しかし、今回のような地震や津波が、今までに一度も起きたことがなかったと言えるだろうか。相手は自然だ。人間の想定の中にすべてを取り込むことなどできない。つまり、想定外であったことを、未曾有と言っているのではないか。専門家社会の想定が50年前の津波の記憶にまでしか遡らないから、未曾有なのだ。一部の専門家は「厳密な証拠を求める科学研究と想定外にも備える防災対策を混同すべきではない」と指摘している。このような混同による対策の遅れは社会の至る所で見られる。霞ヶ浦も同様だ。

私は東京で帰宅難民になっていた間、ずっと考えていたことがあった。それは、人間の文明には文字を捨てるという選択もあるかもしれないというものだ。ネット上では活字メディアから映像などマルチメディアへの移行が急速に進んでいる。地球上にはかつて文字を持たない高度な文明もあった。また、日本も大陸から漢字が導入され普及するまで長い間文字を持たない文化であった。詩歌には今でも文字を持たない文化の痕跡が色濃い。それは、言葉の動性にある。レヴィ・ストロースは「野生の思考」で文字を持たない社会を、未開なので文字を「持てない」のではなく、「持たない」という選択をした社会として捉えている。実際に、私たちが文字に記憶をゆだねたことで失ったものは大きいと思う。

なぜ、私が文字を持たない文明など考えていたのか。それは、「想定」という言葉が「記憶」という言

葉と重なって感じられたからだ。科学に依存する社会では、科学的に評価できる文献や数値などの記録が得られる過去までが、地域の記憶の範囲＝想定範囲になってしまうからだ。しかし、その範囲は地域に眠る記憶のほんの一部でしかない。地域には文字にも数値にもできない膨大な記憶がある。それらは人々の中に眠っている「想定外」であり「未曾有」である。

科学と生きられた生活世界をうまく共存させることで、私たちは記憶の海の渚に再び立つことができるのかもしれない。その海は波のように繰り返し、「持続とは何か」と問う。多くの計り知れない記憶を飲み込んでいった海と向き合いながら、人々はこれからも力強く生きていくのだと思う。

2011年3月26日 代表理事 飯島 博